

キミ子方式による空想画指導に関する研究 —「動く人」を活用した4時間題材についての二つの試み—

松本 昭彦* 金 由惻**

*美術教育講座

**大学院学生

Study on Direction of Imaginary Painting by Kimiko Method —Two Trials of Four Hour Themes with “Person in Motion”—

Akihiko MATSUMOTO* and Yuri KIM**

*Department of Fine Arts Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

キミ子方式による「動く人」を活用した空想画制作について、4時間以内に誰もが描けることを前提にして、はじめに描くべき主役題材の見地から2つの仮説を立てて実験的な授業を試みたが、仮説そのものは修正されなくてはならなかった。しかし「背景は取って描く必要はない」「構図は最後に取りれば良い」「モデルの一部分を切り取って見せることによって見る側の空想が働く」等の新たな知見が得られた。

Keywords：キミ子方式、動く人、空想画、ハガキ絵

はじめに

先の研究¹⁾では、キミ子方式関連の書籍類²⁾に掲載された414に及ぶ絵画題材においては、植物画の作例が圧倒的に多いのに対し、人工物や動物（人物を含む）、風景画の作例が少ないことや³⁾、キミ子方式で描かれる絵画作品は総じて質感や量感に関して写実性がきわめて高い傾向にあること等が分かった⁴⁾。これは描き手の年齢や技量によるものではなく、キミ子方式の指導法そのものによる成果と言える一方、教え方によっては写実の度合がさほど高くなりにくい題材もあることが分かった。「動く人」がそれである。

「動く人」は「美術教育を進める会」の滝口泰正による黄色いチョークを使った人物クロッキーの描き方にキミ子方式考案者の松本キミ子が着彩方法を付け加えた一題材である。『宇宙のものみんな描いちゃおう』（松本キミ子著、太郎次郎社、1987）巻頭のカラー刷り作例では「クロッキー」とも題される。『宇宙のもの…』（pp. 159-162）の他、『三原色の絵の具箱（3）』（ほるぷ出版、1982、pp. 16-17）、『三原色のフィールドノート③風景』（山海堂、1995、pp. 30-31）等⁵⁾にその具体的な描き方を見ることができる。

この方法は簡単にバランスよく全身像を描くのに有効であると考えられるが、衣服の部分には「シワ」の陰影部分と「シワ以外」の2つの調子が与えられるのに対して、肌部分は平面的な表現のままで量感がない点や、目や口の描き方が「けっして、しっかりと描か



図1 紫紅、ワイエス、モーゼスらの画集

ない。ちょっとあればいいという感じ⁶⁾等の点で写実度が上がりにくいと考えられる。

しかしながら「動く人」は他の主役的な絵画題材に添えることで、絵に物語性を付加することのできる脇役的題材として興味深い。人物を入れた風景画の作例は枚挙に暇がないほど多いが、例えばアンナ・メアリ・ロバートソン・モーゼス⁷⁾やアンドリュウ・ワイエス⁸⁾、今村紫紅⁹⁾らの作品を見て、そこに豊かな物語性を感じるのはおそらく筆者らだけではあるまい（前頁図1参照）。そこで本研究では、継続して描いても疲れたり飽きたりしないよう、また学校現場でも時間の工面がしやすいように、4時間以内で誰もが完了できることを前提として、「動く人」を活用した物語性のある空想画の指導法について、主役題材の観点から考察することを目的とした。

1 題材と仮説の設定

本研究における主役題材を選ぶ条件について整理すると、①キミ子方式の基本理念を踏まえて、「誰でも描けること」、②「動く人」は主役題材を描いた後に加筆されること、③4時間で全て完了できる授業内容であることの3点である。

また「動く人」は人物以外の動物を描くことにも応用ができる場合が多い。但し、昆虫類を描くときには「おだんご」¹⁰⁾の数や大きさ等に注意させる必要がある。人物に限らず、描き手に興味関心がある動物も描き入れられるようにすれば一層楽しい授業が展開できると考えた。

これらのことから本研究では、「人物と動物のいる風景」という題材を設定することとした。風景画というと「空があって、樹があって…」等と考えがちであろうが、「空」は単独でも風景画と言えるであろうし、そこに草原や湖、樹等が加わると、いよいよ風景画らしく思えてくるものでもあろう。

風景について松本キミ子は、「景色とはたくさんのものの集合体です。山々の風景、山と川の風景、木々のある森の風景。たった1つの物は風景とはいわないのではないのでしょうか？」¹¹⁾とか、「風景って、モノがいっぱいあって、それらが関係していると思えばいいのです」¹²⁾と書いている。それゆえキミ子方式では、何か主役になるモノに人物や動物等が加わり、それらが互いに関係を持ち合うように描けば、その絵も風景画と呼べるのではないだろうか。

ところで、絵本にはホワイトスペースというものがあり、敢えて説明的な描写をしないことで、逆にイメージを膨らませる効果を期待できるとされる。南雲治嘉は「みっちり描き込まれている絵からは、圧迫感を受ける。ホワイトスペースのある絵は、見ていてストレスを感じない」¹³⁾と言う。したがって、わ

ざわざ地面や空などを描かなくても、絵本の絵のように物語性のある空想画の世界は表現可能であると考えた。

さらにシュルレアリズムの手法の一つである配置転換（デペイズマン）を活用すれば、意外な組み合わせが物語性を引き立てられるであろう。また、大小の関係も非現実的なものにすれば、なおさら意外性が高まると考えた。

そこで次のように二つの仮説を立ててみた。

- 1) 初級題材である「空」を描いた後に「動く人」を描き入れるだけで、物語性のある空想画が誰でも4時間以内に描ける。
- 2) 「果物」を描いた後にハガキ枠を当てて構図を取り、絵を切り取って「ハガキ絵」¹⁴⁾にしてから、「果物」の大きさとの関係を考慮しないで小さく「動く人」を描き入れれば、意外性と物語性を両立した空想画が誰でも4時間以内に描ける。

2 研究の方法

2.1 実験授業と検証方法の概説

仮説を検証するために、幅広い年齢層が参加する公開講座で実験的に授業を行うこととした。題材は前章で述べたように「人物と動物のいる風景」であるが、二つの仮説を検証するため、さらに「空と人」と「果物の国で」の二つのテーマに分けて、2日間の日程で行う。画用紙のサイズについては、両日とも各4時間の講座であることや、主役題材の「空」または「果物」を描き終えた後になるべく多くの「動く人」を描き入れられるよう八つ切りのものを使用する。

仮説の検証方法については、それぞれの題材毎に作品を一つ一つ見て、①制作者の年齢、②4時間での完成度、③物語性の有無の3つのポイントで判定し、他に気づいたことがあれば、それを交えて総合的に行うことにする。

2.2 「空と人」(1日目)の授業計画

実験授業の第1日には八つ切り画用紙をタテに用いて、先ず「空」をキミ子方式の描き方に従って大筆(16号丸筆)で描かせる。画用紙をタテに使うことについては、都会の高層ビル群や高い山々に囲まれた地域にあっても見上げれば空があるので、広さを描くのではなく、高さを表現する目的であることを伝える¹⁵⁾。「空」の描き方は板書で説明することとし、下敷き用の新聞紙も八つ切り画用紙と併せて配布する。

「空」を描き終えた後、スジが気になる受講者には、横長に「雲」を描き入れさせる¹⁶⁾。その後、絵の乾燥を待つ間に「動く人」の描き方について例を挙げて板書で伝える。黄色いチョークとA4サイズのコピー用紙を配布して、練習の意味合いも含めて自由なポーズ

で「動く人」を2~3体描いてもらう。ここまでの所要時間は凡そ1時間で充分であろう。

続いて、乾いた青空の絵の上に黄色いチョークだけを用いて、先ず「自分が〇〇しているところ」を描かせる。最初に描く「動く人」を「自分」にするのは空想画の世界に入りやすいと思われるからである。

その後、着彩の順序を板書で示し、チョークで描かれた「自分」に水彩絵具で色を着けさせる。ここまでの所要時間は体験的に2時間程と推測される。

「自分」を描き終えた後に、「動く人」と同じ要領で魚や昆虫以外の動物も描けることを伝え、黒板にライオンとニワトリを例として描いてみせることにする。二人目以降は、動物でも人物でも好きな方を選び、最初の「自分」と関わりを持たせながら描き足してもら¹⁷⁾ ¹⁸⁾。二人目の着彩を終えたら、一体ずつチョークの下描きを施してから着彩するという順序で次々と増やしていく。

3時間経過後には個別に進み具合を見ながら、さらに「動く人」を増やしたり、キミ子方式で「草原」や、「遠くの森や山」、「池」「湖」等の描き方を助言したりして完成させる。

2.3 「果物の国で」(2日目)の授業計画

受講者1名につきバナナ1本か4分の1のミカンを用意する。ミカンは切り口が新鮮なうちに描けるよう、果物ナイフと俎板も用意して、描く直前に切る方が良いであろう。ミカンを切って断面が見えるようにすることで、立体的な表現をする必要性が薄れ、初心者でも描きやすくなる上、絵にアクセント的な表情が与えられる効果があると思われる。果物では他の柑橘類や柿、キウイなどがそれに該当するであろうし、野菜としては蓮根、スイカ等もそうであろう。

さて、それぞれの果物の描き方については板書で説明をする。どちらか一方を選んで八つ切り画用紙の真ん中あたりにほぼ原寸大になるように描いてもらう。

描き終えたら、ハガキ大の孔をあけた枠をあてて、後からでも消せるように鉛筆で構図を決めさせる。但し、どうしてもハガキ絵にしたい場合は、作者の意思を尊重してそれも可とする。ここまでの2時間以内に終える。

残りの2時間で、果物のサイズとは無関係に「動く人」や動物を描き入れさせる。1日目の経験で練習の必要はないであろうが、復習の意味で黄色いチョークでの描き順と着彩の順序は板書しておくことにする。また必要に応じて、先に決定したハガキ枠の位置を変更することもあり得と思われるが、この場合は消しゴムで鉛筆書きした枠の線を消して、再度構図を決めれば良いと考える。

3 結果と考察

3.1 「空と人」の授業結果

初日の参加者は27名であった。参加者の年齢構成は未就学児(3~6歳)4名、小学校低学年児5名、小学校中学年児3名、小学校高学年児1名、中学生1名、20代1名、30代3名、40代3名、50代3名、60代以上3名であった。高校生の参加者(被験者)がないこと等に関しては不備も指摘できようが、未就学児と小中学生ら子どもの参加者総数が14に対して、成人の総数が13で幅広い年齢構成という点において仮説を検証する上では問題なく思われる。

出来上がった作品を見ると、未就学児や小学校低学年児では、「空」や「動く人」に基づく人物や動物の表現、さらには「草原」等にいわゆる子どもらしさが感じられる。それは繊細な美とか構成的な美と言う類のものではなく、寧ろ大胆で健やかな美とでも言うべきものである。中学生ともなると、もはや大胆な美を感じさせる表現は影を潜めるようになり、丁寧な描き方や漫画的傾向が伺える。小学校の中・高学年児はそこへの過渡期と言えよう。成人の絵画表現には大人らしく上手に描こうとする意識のせいかな大胆な美的表現はなかなか見られない。

人間にも、細かく観察するのが得意な「モヤシ型」と、なんとなく感じを出すのが得意で生命感に満ちた「イカ型」と、抽象化したものを見るのが得意な「毛糸のぼうし型」と、三つのタイプがあるような気がする¹⁹⁾。

の一節が松本キミ子の『モデルの発見』にあるが、子どもの絵は概ね「イカ型」の魅力に通じていると言えるであろう。

このことを踏まえた上で仮説検証のための最初のポイントである「制作者の年齢」によって本題材で絵が描けるか、描けないかを判定すると、参加者全員が「空」「人物(動物)」の他、個別に指導した「草原」、「遠くの森や山」、「池」「湖」等も描けている。このため、本題材は「制作者の年齢」を問わなかったと判定できる。

2番目のポイント「4時間での完成度」で判定すると、「湖」の水面を描こうとした成人の絵の内、1作品は未完成であり、また「空」と「人物」「動物」だけで終えた絵が成人に1作品、未就学児に1作品と小学校低学年児に1作品見られた。残る23作品の4時間以内の題材としての完成度は十分に高かったと判定できる。

3番目のポイント「物語性の有無」については、「動く人」の最初に描く自分」と次に描く人や動物との関係性で決まると考える。またそれを補強させるような小物や背景も大切であろう。27作品の全てが「自分」とそれ以外の生き物(人物または動物)との友好的な関係を築いていることは注目に値する。画中には仲間意識や家族愛等が見て取れる。小物としてはフラワー



注) *は未就学児(3~6歳)、及び小学生の作品
**は中学生の作品

図2 「空と人」の作品

プ、縄跳び、ボール、紙飛行機等の遊具類の他、水槽、気球が描かれた。背景は「草原」が27作品中23作品に描かれた。「海」「湖」等の水面は4作品に現われているが、うち3作品は草原も併せて描いている。背景が「空」だけの作品については上で述べた通り成人の絵に1作品、子どもの絵に2作品、合計3作品あったものの、全体的に物語性は現われていると判定した（前頁図2）。

3.2 「果物の国で」の授業結果

2日目の参加者総数は23名で、1日目と比べて子どもの参加者総数14に変わりはないが、成人では4名の欠席があり、大人の総数は9名となった。年齢構成的には幅が広いものであるため、「年齢に関係なく誰でも描けるか」を検証するには支障はないと思われる。バナナを選んで描いた者は14名、ミカン(4分の1に切ったもの)を描いた者は9名であった。

作品を見て仮説検証の1番目のポイント「制作者の年齢」によって本題材で絵が描けるか、描けないかを判定すると、前節で述べたように概して子どもの絵には「イカ型」の特徴が認められるが、全ての参加者が「果物」「人物(動物)」等がきちんと描けている。このため、本題材は「制作者の年齢」を問わず、誰でも制作が可能であると判定した。

続く2番目の検証ポイントである「4時間での完成度」については、時間不足で未完成となった作品が皆無であったことや、ハガキ枠をあてて構図を取った時点での完成度等から判定して、4時間以内の題材としての完成度は充分に高かったと言える。

3番目の物語性の有無については、始めに描く「自分」と続いて描かれる「人物」または「動物」との関係が関わっていると思われることについては先述した通りであるが、本題材では果物と人物や動物の大きさの関係を敢えて転換しているため、物語性に加えて意外性の有無も重要な判定材料と言わねばならない。完成した全作品を見ると、物語性は見てとれるが、もう一方の意外性については殆どの作品から感じられず、寧ろ可愛らしさを感じるのを禁じ得ない(図4、5)。

3.3 考察

3.3.1 「空と人」に関わる考察

仮説を検証する3つのポイント「①制作者の年齢、②4時間での完成度、③物語性の有無」については、概ね良好な結果が得られたと思われる。しかし、時間不足で完成できなかった作品が1つあったことや、「草原」、「遠くの森や山」、「池」「湖」等を描くことで常識的な、まるで楽しかった思い出を描いたような作品が多く目についたことに関しても疑念が残る。それは物語性であっても、最終的には空想画とは呼べないのではないかという疑問である。例えば、『三原色のフィールド

ノート③風景』(松本キミ子、山海堂、1995、p.31)に掲載の青空を描いた後に雲を描き、その上に「動く人」を描き入れた作例(下図3)のようにしても良かったのではないか。さらに未完成となるような指導法はキミ子方式の基本精神にも反している²⁰⁾。

こうしたことから、設定した仮説は修正されなくてはならず、授業のねらいや展開そのものの見直しも必要であろうと考えられる。

3.3.2 「果物の国」に関わる考察

仮説検証の3つのポイントのうち2つは良好な結果が得られたものと判定したが、残る1つの点で満足できる結果は得られなかった。物語性と意外性を両立させる目的が達成されなかったからである。このことから仮説は修正を要するものと考えなくてはならない。

ところでバナナを描いた者とミカン4分の1を描いた者の作品間で大きな差異があることに気がついた。どちらの果物の場合でもおおよそ原寸大で描いてもらったのであるが、ハガキ枠に収まりきらないバナナの場合、仮説に従って「絵を切り取ってハガキ絵にしてから」(実際の授業展開では、切らずに鉛筆でハガキ大の枠線を入れてから)人物などを描き入れるので、全体像としてのバナナではなく、部分としてのバナナが画中に存在することになり、それによって切り取られた部分に対して見る者からの空想が働くように思われるのである。また、ハガキ絵にしたくない者の作品には全体像としてのバナナの絵の上に人物などが描かれているが、後に方針変更してハガキ絵にした場合にも、同様の効果が得られている。このことからハガキ絵にするのは「果物」終了直後でなく、最後に良いと考えられる。

一方ミカンを描いた者では、1名のみがハガキ絵にする時敢えて部分としてのミカンが残るようにしているが、この作品からも空想を働かせたくなる効果が感じられる。その他の作品では全体像としてのミカンが収まり、人物や動物を描いた後に草原等を描き入れ

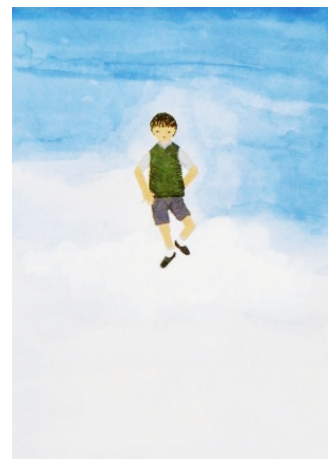


図3 作例(『三原色のフィールドノート』から)



図4 子ども（未就学児及び小中学生）の描いた「果物の国で」作品

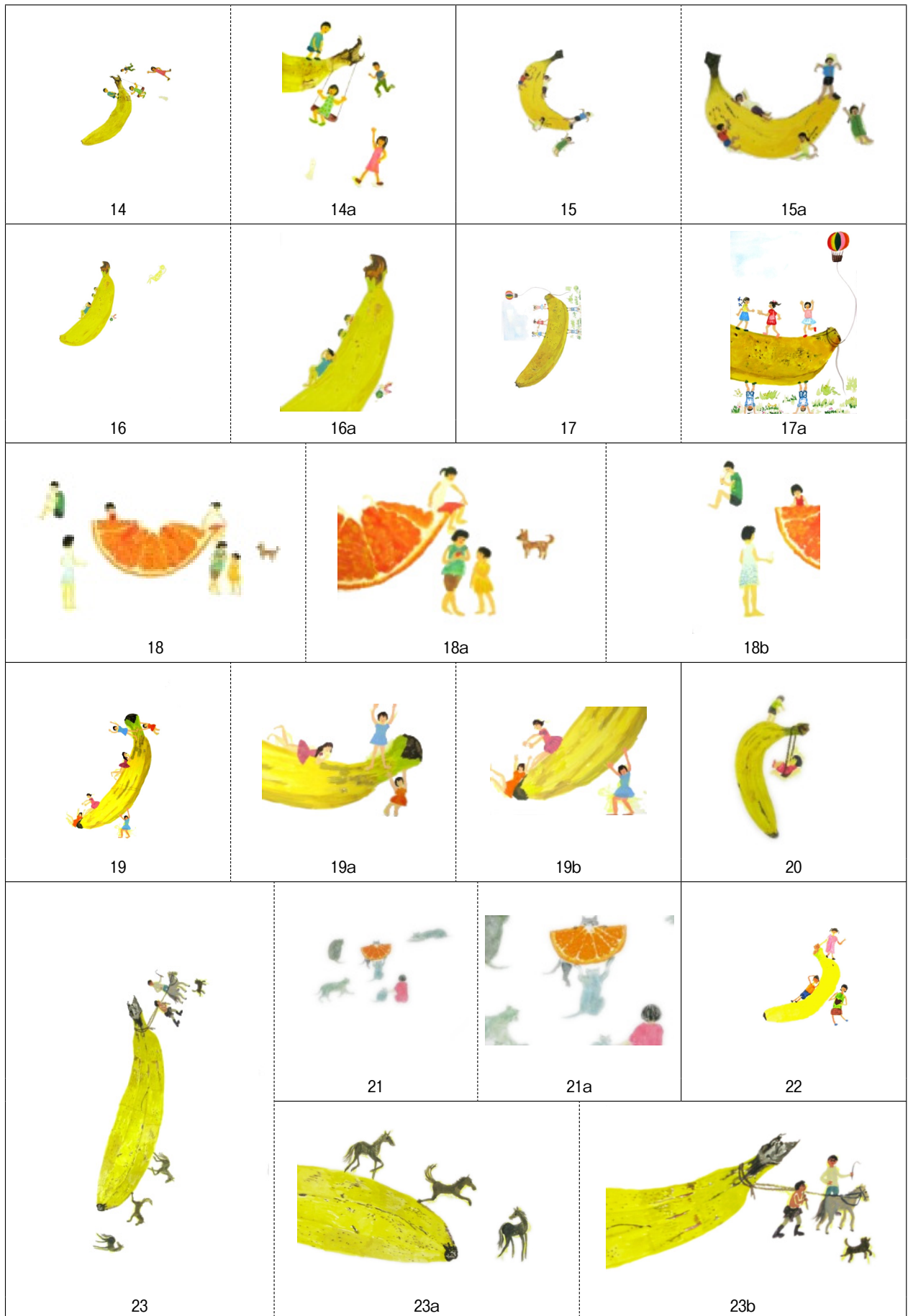


図5 成人（20代～60代以上）が描いた「果物の国で」作品（a～cはハガキにしたときの作品）

ることで、楽しい物語性はあるものの、空想画としての魅力は乏しく思われた。このことからハガキに収まる大きさ以上のモデルを選択することも一手であろうと考えられる。

また、何れの果物を描いた場合でも無背景の作品からは1章で述べた絵本におけるホワイトスペース効果を感じられるが、モデルを切り取った場合に特に有効に作用していると思われる。

4 まとめ

本研究では、4時間以内に誰でも描けるキミ子方式による「動く人」を活用した空想画制作について、はじめに描くべき主役題材の見地から2つの仮説を立てて実験的な授業を試みたが、仮説そのものは修正されなくてはならないという結果となった。しかし4つの新たな知見が得られた。

- 1) 植物題材を主役のモデルにすると、大きめのモノを選ぶと良い
- 2) 背景は敢えて描く必要はない
- 3) 構図は最後に取れば良い
- 4) モデルを部分に切り取って見せることによって見る側の空想が働く

おわりに

空想画とは何かを改めて問い直してみると、単純にモノを見て描かない作者の空想による絵のことでなく、見る側の想像力を働かせるような絵であろうと思われる。仮説を立てるときや授業展開を構想する時点でこの視座が欠落していたと反省している。

それでも授業内容について参加者からは、「とても良い」(54.5%)、「良い」(31.8%)、「普通」(13.6%)という満足度評価が得られたことに救われる感がある。黄色いチョークを使う「動く人」の描き方は殆どの参加者に喜ばれるものであったが、2名からは「りんかくなしに書く方法は、はじめてなので、あまりうまく書けませんでした」と「人物の空想、とてもむずかかった」(何れも原文のまま)という感想が寄せられた。平成24年8月開催の「キミ子方式全国合宿研究大会 in 南三陸」での筆者の「動く人の応用題材について」と題するレポート発表に対しても、「動く人のポーズを考えるのは難しそう」という声の一部に聞かれた。何をしているところかを考えたり、絵に表したりすることが難しいと感じる者がいるのであれば、実際に大きな鏡等の前で制作者自身がいろいろとポーズを試みたり、ペアやグループでモデルをするのも楽しいであろう。本研究がキミ子方式に関心のある方をはじめ、絵画教育に携わる方々の一助になれば幸である。

注

- 1) 松本昭彦、金由惺、キミ子方式の応用題材に関する研究—応用題材開発の可能性について—、愛知教育大学教育創造開発機構紀要、2、2012、pp. 29-36
- 2) 描き方や教え方の説明がないものであっても、水彩画の作例がありさえすれば、書籍に限定せず、パンフレット類に見られるものも含めて調査した。詳細については前掲論文1)を参照のこと。
- 3) 総題材数414のうち植物題材は294(71.0%)、動物題材(人も含めて)は55(13.3%)、人工物題材は31(全体の7.5%)、風景題材は32(全体の7.7%)であった。
- 4) 植物題材の86.4%、動物題材(人も含めて)の72.7%、人工物題材の71.0%、風景題材の21.9%がきわめて写実的な絵であった。
- 5) 松本キミ子、堀江晴美共著、『絵のかけない子は私の教師』、仮説社、1982、pp. 79-81の他、美術の授業研究会編、キミ子方式通信講座中級手引き書、1990、pp. 40-49にも描き方が詳しく書かれている。
- 6) 松本キミ子、宇宙のものみんな描いちゃおう、太郎次郎社、1987、p. 162
- 7) Anna Mary Robertson Moses (1860-1961) はグランマ・モーゼスの呼称で親まれたアメリカの女性画家。
- 8) Andrew Wyeth (1917-2009) は、アメリカン・リアリズムを代表する画家。
- 9) 今村紫紅(1880-1916)は近代日本画家。「近江八景」「熱国巻」等の代表作がある。
- 10) 「動く人」は「おだんご1つ、さくらんぼ、おだんご2つ、…」と、絵描き唄のようにして描き進められる。最初の「おだんご」は腰になり、次の「さくらんぼ」で背骨(の向きと長さ)ができ、続く2つの「おだんご」が腹部と胸部になる。
- 11) 松本キミ子、キミ子方式スケッチ入門、JTB、2008、p. 118
- 12) 松本キミ子、絵を描くってことは、仮説社、1989、p. 38
- 13) 南雲治嘉、常用デザインシリーズ 絵本デザイン、グラフィック社、2006、pp. 52-53
- 14) 松本キミ子、はがき絵の描き方、日貿出版社、1988、p. 8によると、「ハガキに絵を描くのではなく、画用紙に描いて、ハガキのワクをあて、切りぬく」とある。
- 15) キミ子方式で「空」を描くとき画用紙をタテに使う理由について、筆者は教え方セミナーで松本キミ子から直接聞いた。
- 16) 前掲6) pp. 162-164及び前掲11) pp. 50-51等に、「雲」による修正法が見られる。
- 17) 松本昭彦、金由惺、キミ子方式と組み合わせ絵画題材—想像画の指導に関する研究—、愛知教育大学教育創造開発機構紀要、2011、創刊号、pp. 117-125で、画中に登場する人々や動物等は互いに関係付けながら描くと良いことを論じた。
- 18) 松本キミ子、三原色のフィールドノート⑤キミ子方式で描こう! 動物、山海堂、1995に動物の描き方の詳しい説明を見ることができる他、前掲書11) p. 85にも概説的ではあるが、「どんな動物でも毛の流れ、羽の流れ、うろこの流れで描く。まず、鼻が出ているか、口が出ているかを見極めよう」とある。
- 19) 松本キミ子、モデルの発見、仮説社、1999、p. 186
- 20) 松本キミ子、三原色で描く四季の草花、山海堂、1993、p. 19や前掲書11) p. 15等、キミ子方式に関する殆どの著作にどこでもやめられることが基本ルールとして書かれる。

(平成24年11月19日受理)